

穢
された

レオタード

姉妹

淫虐の校内調教

早瀬真人
挿絵 / 猫丸

試し読み版



プロローグ	4
第一章	恥辱と愉悅の痴漢電車	7
第二章	快感に震える処女喪失	61
第三章	可憐な妹に牙を剥く狼	105
第四章	女肉を疼かせるアダルトグッズ	147
第五章	恥悦にまみれた姉妹どんぶり	203
エピローグ	277

登場人物

Characters

桂木 紗弥香

(かつらぎ さやか)

王銘女子学園に通う十八歳。おとなしくて清楚な性格だが、押しに弱い部分がある。スレンダーな体形でアイドル顔負けの美少女。妹と共に新体操部に所属している。

桂木 美玖

(かつらぎ みく)

同じく王銘女子学園に通う紗弥香の妹。十六歳。快活で明るく、人見知りしない性格。最近の女子高生らしくミーハーで惚れっぼい。姉と比べ肉付きが良く、胸も豊か。

槇田 真也

(まきた しんや)

紗弥香達の学園にやってきたK大学在学中の教育実習生。一見すると爽やかで真面目な好青年だが、内心では常に獣欲を滾らせている。

第一章 恥辱と愉悅の痴漢電車

1

(まったく……夜更かしばかりしてるから、起きられないのよ)

ゴールデンウィーク明けの初日、紗弥香は慥然たる面持ちで電車に乗っていた。

いくら声をかけても美玖は起きず、仕方なく一人で家をあとにしたのだが、おかげでいつもより二本も遅い電車に乗る羽目になってしまった。

妹が王銘に入学してから、同じ行為を何度繰り返してきたことか。

もう中学生ではないのだから、しつかりしてほしいものだ。

乗降扉のそばに立ち、外の景色を眺めながら春季大会の結果を思いだす。

惜しくも優勝は逃したが、やるだけのことはやったのだから悔いはない。

王銘の三年生部員は春先に引退し、夏休みまで後輩の指導に尽力する習わしになっていた。

厳しい練習から解放されるのかと思うと、ホッとした気持ちもある。

(来年には大学受験が控えてるし、夏休みからは勉強漬けの日々を送るんだわ。それはそれで、いやだけど……)

王銘女子学園新体操部、悲願の初優勝は後輩らに委ねよう。そう考えたものの、脳天気な妹の顔を思い浮かべたとたん、紗弥香は苦笑を洩らすしかなかった。

美玖の新体操への情熱はお世辞にも強いとは言えず、あの飽きっぽい性格ではとても上達するとは思えない。

(他の子たちに、期待するしかないかも)

才能のある後輩らの顔が脳裏を掠めたところで電車が乗換駅に停車し、紗弥香はガラス扉に映った光景に気色ばんだ。

ホームには、サラリーマンや学生が長蛇の列を作っている。

(また……人が乗ってくるんだわ)

ふだんどおりの電車に乗車していれば、これほどの混み具合ではないのだが……。

両足に力を込めて身構えた瞬間、後方の扉が開き、乗り降りする乗客らの足音が車内に響き渡った。

「……あ」

真後ろに立つ男性の胸が背中にドスンと当たり、凄まじいばかりの圧に恐れおの

く。肩越しに様子をうかがえば、二人の駅員が乗客らの背中を懸命に押ししていた。

車内はすし詰め状態になり、手足の関節がギシギシ軋む。

息をすることすらままならず、紗弥香は額に脂汗をじっとり滲ませた。

（く……苦しい）

苦悶の表情を浮かべるなか、発車ベルが鳴り響き、扉が閉まる音が聞こえてくる。

車体が動きだすと、圧力が徐々に減り、少女はようやく安堵の胸を撫で下ろした。

（もう……美玖のせいだわ）

妹が遅刻しようが関係ない。これからは、一人で通学しよう。

心の中で固く誓った直後、紗弥香はある違和感を覚えた。

ヒップに押し当てられた異物に困惑し、腰を微かによじる。おそらく、男性の股間

なのではないか。

（い、いやだわ）

柔らかい逸物が次第に硬直し、気まづげに唇を噛みしめる。荒々しい息が耳にまわりつくや、あまりの気色悪さに総身が栗立った。

王銘に入学した直後、一度だけ痴漢の被害を受けたことがある。相手は、見るからに五十路を過ぎたおじさんだった。

脂ぎった顔を目にしただけで、生理的な嫌悪から背筋が凍りついたものだ。それでも恥ずかしくて怖くて、ひと言も発せられなかった。

あのときはヒップを軽く触られただけで終わつたが、不快な感覚はいまだに忘れられない。

(あんな思いは二度としたくなかったから、早い電車で通学するようにしたのに)

改めて美玖のだらしなさに憤慨するも、車両から逃げだせるわけもなく、紗弥香は悪夢の時間が過ぎ去るのを待つしかなかった。

カーブに差しかかり、後方の男が身体を預けてくる。

(あ……やつ)

腰がさらに押しつけられ、硬直の物体が臀裂にはまりこんだ。

股間の膨らみは鉄の棒と化し、男性が性的に昂奮しているのは明らかだ。眉根を寄せた少女は、ガラス扉に映った男の顔をさりげなく盗み見した。

年齢はかなり若く、ぱっと見は二十代前半に思える。前髪を垂らしているため、目元までは確認できなかったが、細面で異性にモテそうなルックスをしていた。

(スーツ着てる。社会人かな……痴漢するようには見えないけど)

車内は、身体を動かすスペースがないほどの混み具合である。痴漢するつもりはさ

らさらなく、不可抗力の体勢から単に生理現象を起こしただけなのかもしれない。

(だとしても……やだな)

学園のある駅まであとふたつ、ゆうに二十分はかかる。それまで紗弥香の近くにある扉は一度も開かないのだから、この状況を回避するのはほぼ不可能だと言えた。

ズボンの中心部は相変わらずヒップに押しつけられており、いやが上にも気になっ
てしまう。

男性器の形状が布地を通してはつきりわかり、意識せずとも大きさや太さが脳裏を
よぎった。

もちろん、勃起したペニスを目にした経験はない。

いずれは恋をして、彼氏に女の子の大切なものを捧げる日が来るのだろう。

ヒップに受ける感触からイメージすれば、挿入されたときに激しい痛みを感じても
不思議ではないと思った。

(こんなおっきいの……絶対無理よ)

淫らな想像をしたとたん、己のはしたなさに気づき、頬を赤らめる。

自分はまだ高校生、十八歳を迎えたばかりである。異性との性的な接触は、社会人
になつてからでも遅くはないはずだ。

今はひたすら石になって、やり過ぎすしかない。

気持ち無理にでも落ち着けた瞬間、下腹部に再び違和感が走った。

(……えっ?)

スカートの裾がたくしあげられる感触に、目をカッと見開く。

最初は勘違いかと思っただが、股の付け根に近い太腿の裏側がスースーとしだし、同時に胸の鼓動が高まった。

ありえない、認めたくないという気持ちと動揺が交錯する。

指先が肌の表面をツツツと這いのぼると、今度は恐怖心に見舞われた。

(嘘……嘘よ)

怯えた視線を下方に向ければ、チェック柄の布地が右側だけずり上がっている。

男がスカートを捲っているのは厳然たる事実なのだ。

(ど、どうしよう)

恥ずかしくて、大声をあげる勇氣は少しもない。

誰かが見咎めて、やめさせてくれないか。

少女の淡い期待は叶うことなく、不埒な指はとうとう股の付け根に達した。

今は両足を閉じるだけで精いっぱい。唇の端を歪めた直後、内腿の柔肉は指先の侵

入を容易に受け入れた。

(……あっ!!)

ごつごつした感触がY字ラインの中心に潜りこみ、クロッチ沿いを突き進んでいく。背筋をブルツと震わせた直後、無骨な指がスライドを開始した。

(やっ……やっ)

パンティ越しとはいえ、見知らぬ男に生まれて初めて恥芯を触られているのだ。

指腹は布地の船底を何度も往復し、肉の尖りを刺激していく。

ヒップを揺すって逃れようにも、無駄な努力にしかならず、紗弥香はただ拳を握りしめるばかりだった。

次の駅までは、あと五分ほど。降車する乗客が多ければ、この窮地から脱せられるかもしれない。

一縷の望みをかけ、破廉恥漢の暴拳にひたすら耐える。

(あ……くっ)

男は大きな動きを見せず、器用にも指だけをピストンさせた。

中指なのか、人差し指なのかはわからなかったが、抽送が繰り返されるたびに身体の芯が熱くなっていく。

全神経が一点に集中し、続いて全身の血が逆流した。

嫌悪感の合間に官能の火がポツポツとともり、断続的に襲われる快感に戸惑った。

後方に立つ男は、痴漢という卑劣な行為に手を染める輩なのである。

女性の敵であり、絶対に受け入れてはならぬ存在なのだ。

(早く……駅に着いて)

心の中で懇願したとたん、指先が頂上の尖りを爪弾いた。

(ひっ!!)

甘美な電流が股間から脳天を突き抜け、悦楽を受ける間隔が一気に狭まる。そんな場所に性感ポイントがあるうとは露知らず、未熟な少女は激しくうろたえた。

敏感な箇所を集中的に攻められ、下腹部から力がどんどん抜け落ちていく。

知らず知らずのうちに太腿がふるふる震え、自身の肉体に何が起こったのか、最初はまったくわからなかった。

やがて秘園が疼きはじめ、身体の深部から熱い塊が湧きあがる。

男女の営みの際、愛液が湧出する知識は得ていたが、まさか自分がその状況に置かれていたとは想像だにできなかった。

好意を抱いていた男性ならまだしも、相手は見ず知らずの無頼漢なのだ。

(ど、どうして……)

眉をたわめたところで、次の停車駅が視界に入る。

もはや、遅刻を気にしている場合ではない。

何としてでも、あこぎな男の手から逃げださなければ……。

(もう……途中下車するしかないわ)

そう決心した瞬間、電車が突然速度を落とす、身体が右方向に大きく傾いた。

反射的に足を開いてバランスをとれば、乙女のプライベートゾーンが無防備状態になる。節ばった指がパンティの裾からすべりこむと、紗弥香は心の中であつという悲鳴をあげた。

肩をビクンとわななかせるも、驚愕の声は口から出てこない。

肉唇に添えられた指先は何の抵抗もなく上すべりし、瞬時にして乙女の肉芽をとらえた。

鳥肌が立ったのは、ほんの一瞬だけ。巨大な快感が高波のごとく打ち寄せ、頭の芯が朦朧とする。指は繊細な動きを繰り返す、小さな肉粒をあやし、いらい、はたまたこねまわした。

(ひっ、ひいいいんっ)

熱い潤みが膣内から溢れだしたことに気づかず、無意識のうちに悦楽を享受してしまう。

やつのことで電車が駅に停車し、後方から扉の開く音が聞こえてきた。

何人かの乗客が降り、身体にかかる圧力が減っても、指がパンティから引き抜かれる気配は少しもない。

(に、逃げなきや)

降車する旨を告げ、男を振り払って車外に脱出すればいいのだ。それがわかっていても、紗弥香の身体は根が生えたように動かなかつた。

そうこうしているうちに、再び乗客らが車内に乗りこみ、わずかに空いていたスペースが人の波に埋もれていく。

電車が発車すると、少女は臉の縁を涙で濡らした。

臍を嘔み、自分の弱さを大いに恥じる。

真面目、おとなしい、優等生。周囲の人間は総じて高評価を与えてくれたが、今となつては、そんなものが何の役に立つのか。

非人間的な行為に対し、敢然としてノーを突きつけられる強い心がほしかった。従順な性格を見透かされたのか、男の蛮行はさらに大胆さを増していく。

指が恥肉に戯れるたびに、後悔の念は瞬く間にピンクの靄に包まれていった。

足を開いたことから、もう一本の指が侵入し、陰核とスリットを同時に撈られる。

(あ、あ……やあ)

股の付け根から、くちゆくちゆと淫らな音が洩れ聞こえ、少女はこのとき初めて愛液が湧出している事実を知った。

なんと、ふしだらな女なのか。

見知らぬ男におもちゃ扱いされ、肉体は自分の意に反して快感を受けいれてしまったのだ。

大きなショックに打ちひしがれる一方、肉悦は天井知らずに上昇し、目の前がボーッと霞んだ。下腹部全体が心地いい浮遊感に包まれ、不本意ながらも初めて経験する感覚に酔いしれた。

指先がクリットに押し当てられ、グリグリと掻きくじられる。ヒップに密着した男根が、熱い脈動を繰り返す。

(あ、ああ、だめ)

最初に感じたときは、次元の違う恐怖心が襲いかかる。

ひどい仕打ちを受けているのに、なぜ快感を得ているのか。そしてこのあと、自分

はどうなつてしまふのか。

肉体の中心で生じた悦楽の風船玉は膨張しつづけ、全身の毛穴が一斉に開く。
(こ、こわい)

傍若無人の振る舞いにただ俯くなか、指の動きはますます苛烈さを帯びていった。今では電車の小刻みな振動さえ、快楽に拍車をかけている。

敏感な肉芽をクニクニとくじられた瞬間、あえかな腰がぶるつと震えた。

(ひ、うんっ！)

青白い稲妻が脳天を貫き、肌がねつとり汗ばむ。肉悦の高波が怒濤のごとく打ち寄せ、理性とモラルを一気に呑みこんでいく。

(あ、ん、んううっ)

初心うぶな少女は熱い溜め息をこぼし、初めての絶頂体験に意識を遠のかせた。

ガラス扉に身を預けたところで電車が減速しはじめ、見慣れた風景が視界に入る。
(しっっかり……しなきや)

次の駅では目の前の扉が開くのみだから、この体勢のまま突っ立っているわけにはいかない。それでも正常な思考が働かず、身体が痺れて動けなかった。

スカートの中から手が抜き取られ、大きな手が腰に添えられる。破廉恥漢に身を起

こしてもらっても、頭は朦朧とし、身体に力が入らなかった。

扉が開き、ふらつく足取りでホームに降り立つ。

壁際まで歩き、恐るおそる振り返れば、乗客らは改札口に向かって脇目も振らずに歩いていった。

この人波の中に、痴漢行為を働いた犯罪者がいるのだ。

人物を特定できぬまま、紗弥香は熱っぽい顔でホームにいつまでも佇んでいた。

2

上履きに履き替える最中に予鈴が鳴り、少女は小走りで教室に向かった。

幸いにも正門に教師の姿はなかったが、遅刻したうえに朝礼さえ参列できなかったのだから情けない。

運が悪かったでは済まされない出来事を思いだし、悔しげに唇を噛む。

ホームでしばし呆然としたあと、紗弥香は公衆トイレに飛びこんだ。

卑劣漢の指は、大切な箇所をじかにいじりまわしたのだ。穢らわしさとおぞましさに耐えられず、一刻も早く男の痕跡を消し去りたかった。

ウエットティッシュで女陰を拭いたときは、溢れでる涙を止められなかった。

デリケートゾーンはさっぱりし、気持ちはいくらか落ち着いたものの、今度はパントイの汚れが少女を悲しみのどん底に陥れた。

クロッチにはグレーのシミと、葛湯を思わせる粘液がべったり張りついていたのである。肉体が快楽を得ていたのは紛れもない事実で、自責の念にいやというほど苛まれた。

布地に付着した体液を拭い取るも、湿り気は依然として残ったまま。船底が局部に張りつき、不快なことこのうえなかった。

(新しい下着を買ったほうがいいのかも。ああ、でも……)

休憩時間や昼休みのあいだ、購買部には多くの女生徒が集まる。彼女らの前で、下着を堂々と購入する度胸はなかった。

(今なら誰もいないと思うけど、寄り道をしてる暇はないわ)

息せき切りながら三年A組の教室に到達し、襟元やスカートの裾を整え、平然とした表情を装う。

痴漢の被害に遭ったことは、仲のいい友だちには知られたくないし、気取られたくもない。

後方の扉から入室すれば、賑やかなおしゃべりや笑い声が耳朶を打ち、いつもと変わらぬ光景に緊張がいくらか和らいだ。

注目を浴びぬよう、すり足で自分の席に向かい、学生鞆を机の上に置く。

椅子を静かに引いたところで、となりの席のユカリが心配そうに声をかけてきた。

「どうしたの？」

「……え？」

「遅刻なんて、珍しいじゃない。寝坊したの？」

「う、ううん……お腹が痛くて、お手洗いに行ってたの」

「言われてみれば、顔色が悪いわよ。大丈夫？」

「だ、大丈夫よ」

精いっぱいのお笑みを返したものの、心の中はどんより曇ったままだ。

一転して楽しげな表情で言葉を続けた。身を乗りだし、

「今日から教育実習生が来るって話、聞いてるよね？」

「え、ええ」

「朝礼でね、紹介されたの。男の先生はなかなかのイケメンで、なんとK大生だって。

まあ、私のタイプじゃないけど」

「……そうなんだ」

愛想笑いを返した直後、チャイムが再び鳴り響き、担任の女教師が教室の扉を開けて入室する。彼女のあとに続く男性が視界に入ると、紗弥香はハツとした。

(えっ!!)

細面の男に視線が釘付けになり、心臓がドキンとする。

前髪を垂らした髪型、浅黒い肌、ダークグレーのスーツ。痴漢を仕掛けてきた無頼漢の容姿にそっくりだった。

(ま、まさか……嘘よ)

他人の空似に違いない。そうであつてほしいと願う一方、冷や汗が背中を滴り落ちる。中年の女教師が教壇に立つと、ユカリが小声で呼びかけた。

「紗弥香」

「……え？」

「挨拶」

「……あ」

授業のたびに号令をかけるのは、委員長である紗弥香の役目だ。

「き、起立……礼っ」

大きな声を出したつもりが、言葉が喉の奥から出てこない。それでもクラスメートは席を立ち、深々と頭を下げてから着席した。

担任の姿は目に入らず、男の風貌ばかりが気になってしまふ。

「皆さん、^{まきた}槇田先生が教育実習生として、この学園で教鞭をとることになったのは知ってますね？ このたび、三年A組の副担任も務めていただくことになりました」

最後の言葉に歓声が沸きあがり、蜂の巣をつついたような騒ぎになる。

王銘学園は男性教師が少なく、ただでさえ女生徒らの注目を浴びやすい。

二十代前半の異性ともなれば、なおさらのことだ。

「静粛にっ！」

担任が一喝しても、教室内のざわめきは収まらず、ユカリも先ほどとは打って変わって目を輝かせていた。

（ち、違うわ……きつと別人よ）

破廉恥行為を仕掛けてきた男が、教育実習生として目の前に現れるなんて絶対にありえない。

紗弥香は胸に手をあてがい、無理にでも気持ちを鎮めた。

「槇田先生、自己紹介を」

担任に促され、槇田という男が壇上にゆつくり上がる。

彼があたりを見渡したとたん、少女は目を合わせぬよう、無意識のうちに俯いた。

「ただ今、ご紹介にあずかりました槇田真也しんやです。担当教科は英語で、これからの二週間、皆さんと切磋琢磨しながら充実したものにしたいと考えています。至らぬことも多々あると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします」

あちらこちらで拍手が起こるなか、上目遣いに様子を探れば、男は爽やかな笑顔を振りまいている。

明朗活発な雰囲気、そののない自己アピール。とても、性犯罪に手を染めるタイプには見えない。

どうして、痴漢男の風体をしつかり確認しておかなかつたのだろう。せめてネクタイの色や柄を覚えていれば、同一人物の可能性は格段に跳ねあがるのに……。

仮に槇田が犯人だとしたら、制服から王銘の女生徒だと気づいたはずで、のんびり構えていられるとは思えなかつた。

（やっぱり……人違いかも）

スタイルのいい男はなめらかな口調で話を続けていたが、内容が頭にまったく入っ

てこない。

やがて自己紹介が終わったのか、言葉が途切れたところで、女性教諭が柔らかい視線を投げかけた。

「桂木さん」

「は、はいっ！」

反射的に椅子から立ちあがり、小気味のいい声を返す。榎田と初めて目が合うも、彼の表情に特別な変化は見られなかった。

「放課後にも、校内を案内してあげてちょうだい」

「……え？」

「実習生控え室は、文化館の多目的ルームだから。よろしく頼むわね」

クラスメートの羨望の眼差しをよそに、口元が引き攣つった。

委員長の自分に命じたのは当然としても、二人きりで校内を回るのは抵抗がある。

それでも拒絶する言い訳は思いつかず、紗弥香は洪と々了承した。

「は、はい」

榎田が笑みを送るや、軽く頭を下げてから着席する。

「よかったね。さつそく、お近づきになれるじゃない」

嫉妬しているのか、ユカリが皮肉めいた言葉をかけるも、彼女の声は耳に届かず、少女の心の中にはどす黒い不安だけが渦巻いた。

3

その日の放課後、槇田は文化館の入り口で紗弥香の来訪を待ち受けた。

実習初日ということもあり、控え室には多数の女生徒が訪れるに違いない。

その他大勢を相手にする気は毛頭なく、興味があるのは麗しの美少女一人だけなのだ。

（今朝の様子だと、俺が痴漢の犯人だと当たりをつけてそうだな。でも後ろからだし、ずっと俯いてたから、顔までは確認できなかつたはずだ）

果たして、彼女は一人で来るだろうか。

（友だち同伴も考えられるけど、それならそれでいいや。実習は二週間もあるんだし、慌てる必要はない。あの子がいるクラスの副担任になれたばかりか、こんなに早く接点を持つてること自体、ラッキーなんだから）

今日はいいい先生を演じ、まずは少女の疑念を取り払うことに専念すべきだ。

校舎の通用口に紗弥香が現れると、槇田は目を見張った。

意外にも友だちの姿はなく、やや伏し目がちに近づいてくる。そしてチラリと見上げたと、頭を軽く下げた。

「忙しいのに、すまないね」

「いえ、今日は部活が休みなので」

「……友だちは？」

「え？」

「いや、他の子も連れてくるのかなって思ったから」

さっそく疑問をぶつけると、紗弥香は小首を傾げて答えた。

「先生に指示されたのは……私だけだったので」

「あ、ああ、そう」

美しい少女は、想像以上に生真面目なタイプらしい。もともと、そういうイメージがあったからこそ、痴漢行為を仕掛けても声は出さないだろうと判断したのだ。

「それじゃ、校舎以外の施設をひとつおとり案内してもらえるかな？」

「はい……わかりました」

「最初は……文化館から回っちゃおうか。LL教室の場所だけは教えてもらったんだ

けど、それ以外は何があるのか、よくわからないんだ」
彼女の顔色は優れず、不安げな表情で目を泳がせる。

黒艶溢れるロングヘア、長い睫毛にツルツルの頬、桜桃を思わせる唇。紗弥香を初めて目にしたのはひと月前、自宅マンションがある最寄り駅の改札口だった。

あのときは絶世の美少女ぶりにしぼし惚け、王銘の制服に血が騒いだものだ。

すでに実習先である学園側の内諾は受けていたため、彼女が自分の教え子になる可能性を考えただけで胸が弾んだ。

槇田は予定を急遽変更し、紗弥香のあとをつけ、公営の体育館で催された新体操の競技会を観戦した。

申し訳程度に膨らんだ胸、丸みを帯びはじめたヒップにむちつとした太腿。瑞々しいボディラインと初々しい立ち振る舞いにときめき、レオタード姿に堪えきれない劣情を催した。

この一ヶ月、ストーカーまがいの行為で少女の名前や自宅を把握し、そして今日の朝、内に秘めていた欲望を噴出させたのである。

ホームの混み具合を思い返せば、都合よく真後ろに立てるとは思っていなかった。おかげで彼女の恥肉ををじかに触れたのだから、さらなる淫情が増すのは当然のこ

とだ。

（表情からは、想像もできないほど濡れてたよな。おマ○コのふわとろ感……ああ、たまらん）

指先には、いまだに女芯の感触が残っている。電車から降りたあと、指の匂いを何度嗅いだことか。

甘酸っぱい恥臭が脳髓を蕩かせ、股間の逸物が激しく疼いた。

思いだしただけで、海綿体に熱い血流が注ぎこまれる。

愛液を大量に湧出していたのは事実であり、彼女は汚れた下着をまだ穿いているのかもしれない。

好奇心がくすぐられ、今すぐにも確かめたい衝動に駆られた。

（落ち着け、落ち着け！ 急いては事をし損じるというからな）

満員電車の中と学園内では、状況がまるで違う。下手を打ち、警察沙汰になれば、実習は即中止。大学側にもバレて退学と、人生を棒に振ってしまうのだ。

（でも……かわいいなあ）

斜め前を歩く少女のヒップと美脚に目が釘付けになり、小刻みに揺れるまろやかな膨らみに牡の本能がスパークした。

チェックのプリーツスカートは丈が短めで、太腿の裏側が剥きだしになっている。数時間前、自分はすすべの柔肌をいやというほど堪能したのだ。

スラックスの下のペニスが隆々と反り勃ち、槇田は彼女に悟られぬようにポールポジションを直した。

（やべっ！ チンポが疼いてきた）

無理もない。痴漢行為は多大な刺激を与えたが、射精までには至らず、トランクスの裏地は大量の先走りでベトベトの状態だった。

発散できなかった性欲が息を吹き返し、下腹部全体がムラムラしだす。文化館の階段を昇りはじめると、スカートの奥の惱ましい暗がり胸が熱くなった。

（ああ、もうちよつとで見えそうだ。顔を突っこんでやろうか）

鋭い目つきに変わった直後、紗弥香が肩越しに質問を投げかけた。

「……先生」

「ん？」

「大学は……教育学部ですか？」

「いや、文学部の英文学科だよ。英語が好きでね、九月からはアメリカの大学に留学する予定でいるんだ。実習が終わったら、渡米しないと」

「え？ そんなに早く日本を発つんですか？」

「手続きがあるし、アメリカには叔母やイトコが住んでるから、もしかすると、そのまま向こうに居座ることになるかも」

「教師に……ならないんですか？」

「うーん、正直に言っちゃうけど、進路はまだはつきり決めてないんだ。とりあえず、教員の免許だけはとっておこうと思って。あ、このことは誰にも内緒だよ」

少女からすれば、沈黙の時間が怖いのもかもしれない。図書室や美術室、音楽室やL教室を案内するあいだも、矢継ぎ早に質問してくる。

「大学では、どんな活動をされてるんですか？」

「特別、変わったことはしてないよ。気の合う仲間と、インカレのサークルを立ちあげたくらいかな。今は後輩に任せて、顔はほとんど見せなくなったけど」

サークルには多くの女子大生やOLが入会し、数えきれないほどのコンパや旅行、パーティーなどのイベントを開催した。

おいしい思いをしたケースは一度や二度ではなく、ナンパサークルといっても過言ではないだろう。

彼女らも異性との交流を望んでいたため、ハードルはさほど高くなかった。

甘い言葉をかければ、最後の一線は楽に越えられたし、ベッドインすれば、それなりの反応を見せてくれる。

処女を相手にしたケースは一度もない。

ただ、最初のうちは快楽を追求するだけで満足していたが、簡単に墮ちる女は同じタイプばかりで、いつしか新鮮さを感じることはなくなっていた。

そんなときに、紗弥香の姿を偶然見かけたのである。

一瞬、女神が地上に舞い降りたのかと思った。

可憐で清楚な容姿に、たちまちハートを撃ち抜かれた。

彼女はおそらく、いや、間違いなく男を知らないはずだ。

恋心を寄せると同時に、美しい花園を蹴散らしてやりたい心境に駆られ、あこぎな欲望は日ごとに募っていった。

激しいスポーツに従事している少女は、とりわけ新体操は大きく開脚するため、処女膜が破れているケースが多いらしい。

果たして、紗弥香はどうなのか。

犯罪行為というリスクを冒してまで接近したのだから、このままあきらめるわけにはいかず、何としてでも手ごめにし、純真な美少女を自分色に染めたかった。

(はあ……その場面を考えただけでワクワクする)

牡の狩猟本能が頭をもたげ、猛々しい性衝動を抑えられなくなる。

理性を必死に手繰り寄せた瞬間、少しでもこちらの素性を知りたいのか、紗弥香がいよいよ核心を突いてきた。

「あの……どちらにお住まいなんですか？」

槇田は彼女と同じ、鷺ノ台町わしのだいに住んでいる。美少女の自宅は駅を挟んだ反対側の高級住宅地にあり、白亜の豪邸はお嬢様育ちを如実に物語っていた。

身近に住んでいる事実を告げれば、痴漢した人物ではないかという疑念が確信に変わるかもしれない。

槇田はあえて、逆方向にある駅名をあげた。

「登貴尾町だよ」

「そうなんですか。学生に人気のある町ですよね」

上りと下りなら、同じ電車に乗り合わせることはありえず、痴漢男と教育実習生は別人だと判断したのだろう。

少女は安心感を得たのか、ようやく穏やかな笑みを見せた。

「君……桂木さんは、ずっと女子校？」

「ええ、初等部から王銘です」

「そっか、この学校は初等部から高等部までの一貫校だっけ。来年は、もちろん大学に進学するんだよね？」

「はい、そのつもりです。もう一日早く生まれてたら、今頃は女子大生になってると
思います」

「あ……四月二日生まれなんだ？」

「そうです」

「部活は何をしてるの？」

「新体操部です」

「新体操は、もう長くやってるんだ？」

「はい、中等部に入学してから始めたので、もう六年目を迎えます」

紗弥香はハキハキと答え、階段の踊り場の窓から外を指差す。

「このあと案内しますけど、あそこが記念館です。一階にある講堂で、いつも練習して
るんです」

「ふうん、後ろにある小さな建物は何？」

「体育倉庫です」

少女の口調はやけになめらかで、緊張はすっかりほぐれたようだ。三階に到達すると、控え室の扉が開き、複数の女生徒がにこやかな顔で出てきた。

「あの子たち、女子の実習生のところに遊びに来たんだな」

「そう言えば……教育実習生って、槇田先生以外に何人来たんですか？」

「僕を入れて三人。他の二人は女子だよ。朝礼で紹介されたけど……」

かまをかければ、紗弥香は一転して沈痛な面持ちになる。

少女は痴漢されたショックから、朝礼には参列できなかったに違いない。

（ホームルームには出てたから、それまでトイレにこもってたのかな？）

またもや、今朝方の光景が脳裏に甦る。

火の玉のごとく燃えさかる身体、桜色に染まった頬、唇のあわいから洩れる熱い溜め息。ガラス扉に映った少女の顔は愉悅に満ち、愛液にまみれた乙女の花園は蒸れかえっていた。

恥液で汚れたパンティを確認したい、初々しい秘園を目にしたい。

至極当然の欲求に衝き動かされ、ペニスが最大限まで膨張する。耐えられぬほどの性欲に苛まれ、理性とモラルが忘却の彼方に吹き飛んだ。

どうにかして、誰も来ない場所に連れこめないか。

放課後ということもあり、文化館には人の出入りが少ない。とはいえ、校内の施設に詳しくない今の状況では、あまりにもリスクが高すぎた。

(やっぱり、計画をちゃんと練ってから迫ったほうがいいか?)

思案を巡らせた直後、女生徒らがキャッキヤと騒ぎながらこちらに向かって歩いてくる。

話しかけられても困るし、今は彼女らと顔を合わせたくない。反射的に階段を昇りはじめると、背後から紗弥香の声が聞こえた。

「あ……そっちは」

かまわずU字形の階段を駆けのぼれば、グレーの扉と狭い踊り場が目に入る。

(お、屋上だ)

ここなら、美少女に淫らな行為を仕掛けられるかもしれない。

胸を躍らせつつ、ドアノブに手を伸ばしたものの、鉄の扉は押ししても引いても開かなかった。

「あ、あれ?」

「……先生」

肩越しに振り返れば、紗弥香が階段を昇ってくる。

女生徒らはこちらの存在に気づかぬまま階下に向かい、賑やかな声は徐々に遠ざかっていった。

「屋上は、立ち入り禁止なんです」

「あ、そう」

自殺や事故防止のために、ふだんから鍵をかけているのだろう。当てが外れてがっかりしたもの、紗弥香は何の疑いも見せずに斜め後方に佇む。

甘酸っぱい匂いが鼻腔を掠め、股間の逸物がひと際いなないた。

(やべっ……チンポ、ビンビンだ)

必死の自制を試みたが、欲情のエネルギーはいっこうに引かない。

横目で様子を探ると、胸の膨らみが目に飛びこみ、荒い息が口から放たれた。

屋上が立ち入り禁止なら、この階段を昇ってくる者はいないはず。ある意味、密室と同じ状況なのだ。

耳に全神経を注いでも、階下から人の気配は伝わってこない。

「文化館であと回ってないのは、多目的ルームのとなりにある視聴覚室だけです」

紗弥香は満員電車の中で拒絶するどころか、声すらあげなかった。

死角となった踊り場でも、同様の対応を見せるのではないか。

意を決した槇田は、前を見つめたままぽつりと告げた。

「どんな感じだった？」

「……え？」

「今朝のことだよ」

しばし間を置いてから振り向き、じっと見据えれば、少女は眉をひそめる。

「あ、あの……」

「微かな喘ぎ声が聞こえてきたけど……」

口角を上げたところで、彼女は目に見えて顔色をなくしていった。

「すごい濡れてたよね」

「あ……あ」

「ひよつとして、セックスに興味があるのかな？」

口元が引き攣り、いやいやをしながら後ずさる。槇田は間合いを詰めつつ、さらに

卑猥な言葉をぶつけた。

「それとも彼氏がいて、おマ○コしちやってる関係なのかな」

瞳に動揺の色が走り、今はプチパニックに陥っているとは思えない。

逃げだそうものなら手首を掴むつもりだったが、蛇に睨まれた蛙のごとく、紗弥香

は決して大きな動きを見せなかった。

勞せずして踊り場の隅に追いつめ、軽く抱きつけば、しなやかな身体が極寒の地に放りだされたように震える。

バストの柔らかい弾力が胸に合わさり、ストラックスの中心部が大きな三角の頂を描いた。

ゴムまりのような弾力と感触には、ひたすらうっとりするしかない。下半身の異変に気づいたらしく、紗弥香は気まずげに視線を逸らした。

「や……やめてください」

拒絶の言葉は、聞き取れぬほど小さい。よほどの引っ込み思案なのか、それとも恥ずかしいという気持ちが強いのか。

どちらにしても、満員電車のとぎと同様、大声や悲鳴をあげることにはなさそうだ。

安心感を得た槇田は、熱のこもった膨張物をグイグイ押しつけた。

下腹に当てたペニスが圧迫され、尿管から先走りの液が滲みだす。

ぬるりとした感触とともに甘美な電流が脊髄を駆け抜け、知らず知らずのうちに目が血走った。

「ああ、気持ちいい。朝は出すことができなかったから、すぐくつらかったよ」

「あ……やつ」

「ずるくないかい？ おマ○コいじられて、自分だけイッチャうなんて」

都合のいい思いこみなどではなく、少女は確かに絶頂への螺旋階段を駆けのぼったはずだ。

ストレートな物言いで見守ると、紗弥香は頬を桃色に染め、恥ずかしげに唇を歪めた。

（やつぱりイッたんだっ！）

全身の細胞が歓喜に打ち震え、新たな性のエネルギーが内からほとばしる。

槇田はここぞとばかり、乙女の羞恥心をあおった。

「おマ○コ、エッチなおつゆでグチヨグチヨだったよね。ごまかしてもだめだよ。僕の指は、はつきり覚えてるんだから」

彼女は何も答えず、顔を背けて口を引き結ぶ。首筋に唇を這わせれば、小さな悲鳴をあげて身を竦すくませた。

「……ひっ」

「ああ、甘酸っぱい汗の匂いがするよ。そう言えば、電車の中でたっぷり汗を掻いてたっけ」

スカート越しに伝わる下腹の感触が、柔らかくて心地いい。怯えた眼差し、小さく震える睫毛、プリツとした唇に、牡の征服本能が燃えさかる。

横田は舌なめずりしたあと、スカートの裾をそつとたくしあげた。

「パンティは穿き替えたのかい？」

紗弥香は横を向いたままハツとし、両内腿を狭める。

困惑げな様子から穿きつづけている可能性が高く、あまりの期待感に脳幹がバラ色に染められた。

太腿に指先を這わせ、徐々にVゾーンに近づけていく。

「あ……あ、や、やめて……ください」

「大きな声で助けを呼べば、僕は実習一日目でクビになるわけだ。でも、ただでこの学校は去らないよ。痴漢された君が、感じて愛液を垂れ流していたことを暴露するからね」

脅しをかけると、紗弥香は真正面を向き、つぶらな瞳を涙で膨らませる。

睨みつけているのだろうか、目力は弱々しく、とても強硬な抵抗を試みるとは思えない。

「あ……うんっ」

指先がパンティの中心部に達した瞬間、少女は肩をひくつかせ、やけに色っぽい声を洩らした。

（はああ、食べちゃいたいくらい、かわいいっ！）

再び首筋に唇を押し当て、かぐわしい体臭をクンクン嗅ぎまくる。

緊張から発汗し、肌が湿り気を帯びると同時にぬっくりした熱気が立ちのぼった。

肉の尖りにあたりをつけ、指先をくるくる回転させる。

少女は上下の唇を口の中ではみ、声を必死に押し殺していた。

（これなら、声はあげられないよな……ようしっ！）

電車内での痴漢行為は背後からだったが、今度は前から、彼女の様子をうかがいながらいたずらできるのだ。

やる気が漲り、ペニスがストラックスの下で小躍りした。

脳内アドレナリンが湧出し、もはや雨が降ろうが槍が降ろうが止まらなかつた。

腕に力を込め、指先をY字ラインの中心にすべりこませる。

少女はまたもや顔を横に振り、目を閉じてから眉間に皺を寄せた。

不埒な指技に抗う表情は、車内のときと変わらない。

人の目を気にする必要はないだけに、槇田はためらうことなく指先を蠢かせた。

中指を往復させ、クロッチの表面を執拗に攻めたてる。

「ン……ンうっ」

紗弥香は鼻からくぐもった吐息を放つも、快感を得ているかはわからない。それでも股布は湿り気を帯びはじめ、ふしだらな熱気が手を包みこんだ。

「気持ちいいんだろ？　ちゃんとわかってるんだからね」

「ひ、うっ!!」

ここぞとばかりに腕を激しくスライドさせれば、少女は目を閉じ、腰を微かにくねらせる。

こめかみがひくつき、首筋に汗の皮膜がうつすら浮かんだ。

小高い胸の膨らみが忙しく波打ち、目元がねっとり紅潮した。

パンティ越しの肉突起に指腹をあてがい、小刻みな回転をこれでもかと与える。

愛液が大量に溢れでているのか、布地の中心が早くも濡れそぼつ。

「ンっ、やっ、くっ」

「どんどん濡れてくるよ。やっぱり、気持ちいいんだ？」

指先に力を込め、グリグリこねまわすと、紗弥香は形のいい顎を突きあげ、やがて脱力していった。

(……イッたか?)

少女は双眸を閉じたまま、身体を壁に預けている。

絶頂に導いたと確信した榎田はほくそ笑んだあと、スカートをたくしあげながら腰を落とした。

(おおっ、パンティだっ!)

フロント上部に赤いリボン、裾にはフリルがあしらわれた、女子校生らしい純白のコットン生地に狂喜乱舞する。

上目遣いに様子を探れば、彼女はまだ快楽の余韻に浸っているようだ。

クロッチに浮きでた愛液のシミ、肉土手のこんもり感がたまらない。

榎田は息せき切って布地を引き下ろし、楚々とした恥毛の翳りに喉をゴクンと鳴らした。

(そのまま、ポーッとしてくれよ)

切に願いつつパンティをさらに剥き下ろせば、甘酸っぱい恥臭が鼻先にふわりと漂う。

二枚の唇が目飛びこむと、榎田は心の中で快哉を叫んだ。

(お、おおおっ!)

全体がベビーピンクに彩られ、中心部に刻まれた恥肉の形状が男心をそそる。

乙女の花びらは少しの歪みもなく、ストレートなラインを描いていた。

なんと、美しいフォルムなのか。

こんなきれいなおマ○コは、これまで一度も目にしたことがない。

薄い肉帽子を半分だけ被ったクリトリスがちよこんと顔を出し、愛くるしいことこのうえなかつた。

汗の匂いと体臭、尿臭や分泌臭がブレンドされ、馥郁たる香りと化して鼻腔粘膜を刺激する。

クロッチに目を向けると、グレーのシミ、レモンイエローの縦筋、葛湯を思わせる愛液にカピカピに乾いた粘液の跡が脳漿を沸騰させた。

（おおつ、すごい汚れだ！）

もはや、間違いない。少女は、汚れたパンティを穿き替えなかつたのだ。

再び恥肉を仰ぎ見れば、秘裂の狭間が愛液できらきら光っている。微かに覗く鮮やかなピンク色の内粘膜も、牡の情動をレッドゾーンに飛びこませた。

（はあはあ……はああつ）

かぶりつきたい衝動を必死に抑え、懸命にパンティを脱がせる。

慎重に片足ずつ上げ、布地を足首から抜き取ったところで、頭上から小さな呻き声が洩れ聞こえた。

4

「う、うん」

痴漢をされたときと同じく、全身が気怠い感覚に包まれている。

意識が朦朧とし、頭はいまだにブーツとしたままだ。後ろに壁がなければ、床に倒れこんでいたのではないか。

思考がようやく働きだすと、紗弥香は下腹部の異変に気がついた。

目をこわごわ開ければ、槇田はパンティを自身のズボンのポケットに入れている最中だった。

(あつ、やつ!!)

スカートはいつの間にかウエストまで捲られ、恥ずかしい箇所が剥きだしにされている。痴漢男は、やはり教育実習生と同一人物だったのだ。

どうして、彼の言い分を信じてしまったのだろう。己の浅はかさを呪ったものの、

今は後悔している暇はない。

慌ててスカートを下ろそうとした刹那、ひと足先に槇田が股間にむしゃぶりつき、少女はあまりの出来事に大きな悲鳴をあげそうになった。

周囲に人影がないとはいえ、場所は校内であり、声を聞きつけた誰かがやってきたら……。

その光景を想像しただけで、恐怖に身の毛がよだつ。

たとえ自分に過失がなくても、噂はあっという間に広がり、いたたまれなさから学校にいられなくなるかもしれない。

「や、やめて……ください」

両足を閉じて小声で訴えても、彼は怯まずに顔をグイグイ押しつけた。

親にさえ見せたことのない大切な秘部を、初めて会った男に晒しているばかりか、口で愛撫されようとしているのだ。

おそらく、彼はパンティの汚れも確認したに違いない。不快感に続き、猛烈な羞恥が込みあげた。

（いや、いやっ！）

腰を振って逃れようにも、太い指が両太腿の側面にがっちり食いこんでいる。手で

頭を押しつけようとしてもビクともせず、やがてヌルツとした感触が股の付け根に走った。

舐められている。乙女のデリケートゾーンを、舌でなぞられているのだ。

「ひっ！」

もはや、なりふりかまっていられない。大声で助けを呼ぼうとした瞬間、大きな衝撃波が花芯を襲った。

舌先がスリットを往復するたびに、快樂の高波が次々と打ち寄せる。

驚愕の眼差しを下方に向け、四肢に力を込めても肉悦に抗えず、不埒な舌にいちばん敏感な箇所を攻めたてられた。

「は、うっ……！」

片手で口を押さえ、泣き顔で声を押し殺す。

一日二回も、なぜこんなひどい仕打ちを受けなければならないのか。

睫毛に涙を滲ませたところでクリットが上下左右に転がされ、意識せずとも背筋が反り返った。さらには窄めた唇で肉芽をチューチュー吸われ、身体の芯が火のごとく燃えあがる。

(んっ！ んっ！)

子宮の奥がひりつき、温かい潤みが源泉のごとく溢れだした。

指とは比較にならぬ快美に翻弄され、性感が急角度で上昇のベクトルを描いた。五感が麻痺し、一瞬にして快楽の海原に放りだされる。

全身がまたもや浮遊感に包まれ、意識せずとも恥骨が前後にわななく。

(だめ……だめっ)

舌先が肉粒を押しひしやげさせた直後、色とりどりの閃光が瞬き、肉体の深部にともった官能のほむらが全身に飛び火した。

(あ、やつ、やつ、やああああああつ！)

目が眩むような快感に、今度は立っていられない。

頭の中で白い火花が八方に飛び散り、壁伝いにずるずると膝から崩れ落ちる。

「はあはあはあっ」

紗弥香は双眸を閉じたまま、湿った吐息を延々とこぼした。

甘美な感覚が全身に波及し、身も心もとろとろに蕩かされる。

性の扉を開け放ち、快感を全身全霊で享受するなか、少女は異様な気配を肌で感じ取った。

ジジジッという金属音が耳に入り、続いてムワツとした空気が頬をすり抜ける。

目をうつすら開けた紗弥香は、眼前に聳え立つ男性器に虚ろな眼差しを注いだ。

パンパンに張りつめた宝冠部、えらのがつちり張った雁、太い胴体にはミミズをのたくらせたような静脈がびっしり浮きでている。

饅えた汗の匂いが鼻腔を掠め、思わず小鼻を膨らませるも、自分がどんな状況に置かれているのかはつきりわからない。

ひとつ目小僧を思わせる先端は口をぱくぱく開き、透明な液体を絶え間なく湧出させていた。

粘っこい雫が床に向かって滴り落ちる頃、思考回路がやっと回復しだす。

(あ、やつ)

榎田はズボンのチャックを引き下ろし、合わせ目から男性器を引っ張りだしていたのだ。

ペニスの切っ先が、自分を突き刺すかのごとく鎌首をもたげる。

慌てて立ちあがろうとしたものの、身体に力が入らず、逃げだすことはできそうになかった。

彼はこのうえ、何をしようというのか。

忘れかけていた恐怖心が甦り、引き攣った表情で肩を窄める。卑劣漢はにやりと笑

い、肉筒を握りしめて軽くしごいた。

「勃起したチンポ、目にするのは初めてかな？」

「あ、あ……」

「一日に二度も悩ましい姿を見せられたら、我慢できるわけないよね。ほら、もうビンビン。君がこうさせたんだよ」

戦慄に身を強ばらせるも、なぜか赤黒く膨らんだ肉実から目が離せない。

男性器の圧倒的威容には息を呑むばかりで、かわいらしいおチンチンというイメージはなく、おどろおどろしいという感想しか抱けなかった。

自分もいつかは、こんなペニスを受けいれる日が来るのだろうか。それとも、彼の性器が特別大きいだけなのか。

茫然自失するなか、思わぬ言葉が鼓膜を揺らした。

「触ってよ」

破廉恥な要求に首を縦に振れるはずもなく、狼に見据えられた子羊のように身を震わせる。

「尿道口から精液が出るのは知ってるだろ？ 男っていうのはね、一度火がつくと、放出するまで収まらないんだ」

牡の肉は、目と鼻の先でいなないているのである。あまりのショックから、いやですという言葉が喉につつかえて出てこない。

槇田が自分でこするたびに、ペニスはますます強靱な芯を注入させていった。

「ほら、こうやってしごけばいいんだから、簡単だろ？ 何なら、お口でしてもらってもいいんだよ」

オーラルセックスの知識は友だちから聞いていたが、生理的嫌悪しか覚え、自分にはとても無理だと思った。

顔を小さく横に振り、拒絶の姿勢を示すも、男はまったく引かずに追いたてる。

「僕だって、お口でしてあげたよね。自分だけ気持ちよくなるのは、ずるいんじゃないかな？」

こちらの意思を無視して無理やりしてきたのだから、とても正当性があるとは思えない。

とはいえ、この場から逃げだせぬ以上、乙女の貞操は絶体絶命の危機にあるのだ。何としてでも、最悪の結末だけは避けたかった。

「そんな深刻に考えることないでしょ。男っていう生き物は、とりあえず出しちゃえば、すつきりするんだからさ」

「ホ、ホントに……」

「ん？」

「それで……落ち着くんですか？」

「ああ、もちろんだよ」

果たして、信用していいものか。

相手はためらうことなく、実習先の生徒に手を出してくる輩なのである。逡巡する最中、階下からまたもや足音が聞こえ、背中を冷や汗が流れた。恐怖に身を縮ませるも、槇田は平然とした顔をしている。

人の気配が遠ざかると、紗弥香は胸に手を添え、大きな溜め息をついた。「ふふっ、そんなに心配しなくても大丈夫。女子の実習生が帰ったんだよ」槇田は冷ややかに言い放ち、壁に両手をつけてペニスを突き出す。

また誰かがやってくる可能性を考えれば、もはや迷っている暇はなかった。生きた心地がせず、精神的な限界はとうに超えているのだ。この状況から、一分一秒でも早く脱出したい。

意を決した紗弥香は、震える指をしなる肉の塊に伸ばした。

「お、ふっ！」

胴体にそつと指を絡めれば、槇田は顔をくしゃりと歪め、小さな呻き声を放つ。

よほど気持ちいいのか、ぎらついていた目が瞬く間にとろんとなった。

「ど、どう？ 初めてなんだろ？ 勃起したチンポを触るのは。どんな感じ？」

心臓が拍動し、なぜか胸の奥が重苦しくなる。

ペニスは火傷しそうなほど熱く、全体がビクビクと脈動していた。

極太の肉胴は指が回らず、鈴口から透明な粘液がたらたらと滴り落ちる。

眼前で跳ね躍る異形の物体を、少女は瞬きもせずに見つめた。

「そのまま……上下に指を動かすんだよ。あ、安心して。いざとなったら、精液は後ろの壁に向かって出すから」

言われるがまま軽くしごいただけで、怒張はひと際膨張し、ふたつの肉玉が吊りあがる。獣じみた匂いが鼻腔を燻^{いぶ}し、嫌悪感に襲われるも、動悸は激化の一途をたどるばかりだ。

身体をわずかにずらし、ペニスの先端を斜め上の壁側に向け、紗弥香はやや俯き加減で指の律動を開始した。

「お、お、おっ……いい、気持ちいいよ」

スライドの合間に射出口をチラチラと盗み見し、渾身の力を込めて剛槍をしごきた

てる。やがてくちゅくちゅと、淫らな水音が響き渡った。

(あっ、やっ)

尿道から垂れ滴った淫水が指の隙間にすべりこみ、卑猥な音を奏ではじめたのだ。一瞬怯んだものの、手の動きを止めれば、射精という最終目的は果たせなくなる。紗弥香は唇を噛みしめ、一心不乱に指先を往復させた。

「もつと……リズムカルに。そ、そうだよ。ちゃんと、チンポを見て」

仕方なくペニスを仰ぎ見ると、鬱血した宝冠部はいつの間にか粘った淫水でぬめり返っていた。

青筋は張り裂けんばかりに膨らみ、手のひらに熱い脈動をビクビク伝える。

(あ、あ……すごい)

子宮の奥がひりつき、口の中に大量の唾が溜まった。

温かい潤みが膣から再び溢れだし、内股をすり合わせれば、ぬるぬるした感触に戸惑った。

牡のムスクが鼻腔を突き刺すたびに、またもや意識が朦朧としてくる。

いったい、自分はどうなってしまったのか。

初対面の男からひどい仕打ちを受けているのに、こんな気持ちになるなんて……。

もしかすると、自身の身体の中には淫蕩な血が流れているのかもしれない。

自己嫌悪に陥った直後、榎田はやけにざらついた声で嘯うそぶいた。

「むむっ、気持ちいいけど、やっぱり手だけだとキツいかな。ねえ、口でしてくれない？」

「そ、そんな……」

驚愕のセリフに放心し、許しを請うような顔で卑劣漢を仰ぎ見る。

「僕も、してあげたでしょ？ あと、ほんのちよつとで射精するんだからさ」

「で、でも……」

「大丈夫っ！ 出すときは、ちゃんと口から引き抜くから」

「……あ」

握りこむ力が緩んだ隙を突いて、榎田は挿んだペニスを顔の真正面に向けてきた。

反射的に首を振り、唇を閉じるも、火箸のような剛直が口元に押しつけられる。

（ひどい……ひどいわ）

男性器を触るだけでも初めての経験なのに、口戯で快感を与えられるはずがない。

決死の覚悟で臨んだ手筒の刺激も徒勞に終わり、少女は耐えがたき事態に正気を失いそうだった。

「早くっ。もたもたしてると、警備員が上がってくるかもしれないよ」
槇田の言葉に、血の気が引いた。

校内には生徒や教師の他に、警備員がいたのだ。彼らなら、見回りのために屋上への階段を昇ってきてても不思議ではない。

「さ、お口を開けて。手荒なマネはしないから」

先端で唇をこじ開けられ、紗弥香は泣く泣く口を開け放つしかなかった。

「ソっ!! ぶっ、ぶうっ!」

熱い塊が唇の隙間から潜りこみ、汗臭い匂いが口の中いっぱい広がる。顔を引こうにも壁に遮られ、灼熱の棍棒が遠慮なしに差しこまれる。

息が詰まり、苦悶の表情で鼻での息継ぎを繰り返した。

肉棒はすぐさまスライドを開始し、先端が喉元を何度もつついた。

「ぶっ、ぶぼっ、ぶふう!」

「おほおおっ、ああ、気持ちいいっ」

抽送の回転率が増し、牡の肉が口の中でのたうちまわる。

口の狭間から濁った唾液が溢れだし、顎の下からつららのように滴り落ちた。

しょっぱくて苦い味覚が鼻腔を突きあげ、吐き気を催すも、今は悪夢の時間が過ぎ



去るのを待つしかないのだ。

「はああっ、たまらんっ、イクっ、イキそうだ」

槇田は嘎れた声をあげ、腰を容赦なく打ちつける。

（お願い……早く、早く……出して）

顎が外れそうな苦痛に耐えつつ、目をうつすら開ければ、槇田はいつの間にか手にしたスマホをこちらに向けていた。

（やっ!!）

小さなレンズが視界に入り、ギョッとする。

動画モードで撮影しているのなら、為すがままの状態でいるわけにはいかない。

あまりの蛮行に戦慄が走り、身をよじって脱出を図ろうと試みる。次の瞬間、肉筒が脈動し、熱いしぶきがほとばしった。

「お、おおおっ」

「ソっ、ふっ!!」

今度は生臭い匂いが口腔に広がり、眉根を寄せて激しく噎せる。

「まだまだ、こんなものじゃ終わらないぞ」

欲望の排出は、一度きりでは終わらない。二発、三発、四発と立てつづけに放たれ、

少女の口中は瞬く間に汚液まみれになった。

「ぐっ、んっ、ぶふうっ」

「さあ、飲め、全部飲むんだ。一滴残らずだぞ」

大きな手で頭を鷲掴みにされ、肉棒を口から抜き取ることができず、どろどろの淫液に胸がムカムカする。

(いや……やああああっ)

槇田の体液を喉の奥に流しこみながら、少女の意識は忘我の淵に沈んでいった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリシノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキキアラノベル

ドキドキキアラノベルな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫